我らが人生の日々

芸術監督：M.P.セマコフ
演出担当：M.A.シュヴィトカーヤ

原作：レオニード・アンドレーエフ(1817～1919)

ロシア西部のオリヨールで生まれる。小説家・劇作家。『7人の死刑囚』、『赤い笑い』など。1917年ロシア革命後、フィンランドに亡命、移住する。夏目漱石も影響を受けたと言われる。『我らが人生の日々』の原題は『学生の恋』。ソ連の雪どけ時代に彼の故郷オリヨールで復活し、各地で演じられるようになる。

あらすじ

―第1幕―

9月初め、黄金の秋がやって来るモスクワのスズメが丘大学生と女子専門学校生が散歩にくる。皆から離れて二人になるオリガとグルホフツェフ。二人は愛し合っていることを確かめる。仲間たちがやって来て、歌ったり飲んだり。大学生のオヌーフリイは“静かな家庭”を求めて下宿先を転々としている顛末を語る。若者たちのくったくないひととき…

―第2幕―

トヴェルスカヤ並木道のベンチでオリガ、グルホフツェフ、ミーシカ、オヌーフリイ、ブローヒンが話し合っている。やがてベンチには恋人二人が残される。エヴドキヤが通りかかり二人に気づき、またどこかへ行く。母への憎しみを露にするが、悲しげなオリガ。驚く彼。オリガの母が客引きをしてオリガが娼婦をやっていることが明らかになる。母の年金では二人の生活はどうにもならない…　二日も食べていないオリガ。なぜ働かないのかと問うグルホフツェフ。なぜそうなったのか飲み込めない彼。言い争い絶望する二人。オヌーフリイが現れる、二人のことに巻き込まれる。エヴドキヤも現れて娘を引っ張っていく。他の友だちも戻ってくる…　愛は存在するのか否かを論じ、釈然としないまま、飲みに出かける学生たち…

―第3幕―

オリガと母親が暮らすアパートの部屋。命を絶ちたいと思うほど落ち込んでいるオリガ。エヴドキヤが雇うアンヌシュカがベッドメーキングに来る。もう客を決めてきたエヴドキヤ。だがオリガのもとにグルホフツェフが来ることになっている。母娘の争い。母は一時間出ている間に二人が決着をつけるよう求める。74号室に住む彼をアンヌシュカが呼びに行く。愛し合う二人の葛藤。何の解決の糸口も見つけ出せず絶望して走り去る彼。同じく絶望に打ちひしがれて残される彼女。だが彼女には“仕事”が待っている。母が戻り、男が現れる。妻子も、婚礼間近な娘もいるフォン・ランケンが…

―第4幕―

同じ部屋。誰もいない部屋にエヴドキヤ、その後ろから若い陸軍少尉グリゴーリイ・ミローフォフが入ってくる。二人とも買い物をたくさん抱えて。彼は少し酔っている。エヴドキヤに宴会の用意をさせ、知り合った学生たちを呼びにいくグリゴーリイ。彼は地方からモスクワへ数日の予定で出てきた。モスクワで大学生オヌーフリイとグルホフツェフと知り合って有頂天になり、オヌーフリイとは兄弟の契りさえ交わす。少尉は何も知らず、オリガを呼びにやる。事情を知って暴れるグルホフツェフ。彼は母娘を非難し辱める。嘆き悲しむ母娘。オヌーフリイに促されてオリガは怒り興奮する母を連れ出す。
二人の男の争い。事情を知って引き下がるグリゴーリイ。間に入ったオヌーフリイがすべてをうまく収める。真実はどこにあるのか、どうすればいいのか、誰にも分からない。深い悲しみ中から、抑え切れないような若い力があふれ出す。だがグルホフツェフは泣きじゃくり、真っ青な顔で現れたオリガは彼を見つめる…　　幕

シューキン名称国立演劇学校とは

1914年10月23日にシューキン名称演劇学校として創立されたと言われる。と言うのも、この日スタニスラフスキーとスレルジツキーの教え子であるエフゲーニー・ワフタンゴフが彼の周辺に集う学生たちに始めてスタニスラフスキー・システムの講議を行なった。ワフタンゴフは、それを基盤にスタジオを創設し、それが劇団に発展し、その中に学校が作られた。この学校から優れた演劇人が生まれ活躍する。ワフタンゴフは亡くなる前にモスクワ芸術座に自分の劇団とスタジオを託し、同芸術座の第三スタジオとなる(1920年)。しかし、1926年、第三スタジオはワフタンゴフ名称国立劇場の地位を得る。学校は後に、同校出身の卓越した俳優・教育者ボリス・シューキン名称となり(1939年)、現在に至る。

■劇場シアターX(カイ)のご案内

東京都墨田区両国2-10-14　☎03-5624-1181
JR総武線「両国駅」(西口)下車 徒歩3分